

’93年東北地方凶作に思う

岩手大学 竹村 祥子

月に何回か東北新幹線に乗って盛岡（岩手県）と東京を往復する生活に入って6年になります。そして1993年の夏から秋にかけてほど、東北地方の農村地域と首都圏の抱える問題や現状の間が、分断されて存在していることを実感させられた年はありませんでした。

ことの始まりは、大学が休みに入った7月中頃のことでした。例年ならば暑くてムシムシする研究室で、扇風機を回しながら前期にし残した仕事をかたづけるのですが、この夏はいっこうに暑くなりませんでした。7月の中旬に、岩手県北の葛巻町を訪ねる機会がありました。葛巻町は北上山系にある町ですが、訪問途中の道筋の山々は霧で曇っているようにも見えて、到着してみると涼しいのではなく、寒いという状況でした。この気候が中学校の教科書などにかかっているあの「ヤマセ」であることは後で知りました。7月の下旬、稲の生育の遅れやいもち病の心配が県内版ではとりあげられましたが、近郊の田圃の稲は青々として、素人目にはその問題点は実感できませんでした。

8月になってもどんよりとした日が続きました。このころになると、盛岡の街中でも近

郊の稲の育ち具合が良くないことがささやかれ始めました。8月下旬、県北の各地では、凶作が予想され、秋祭りを取りやめなければならないという話がもち上がっていました。ところが、全国紙（朝日新聞）は、県内版の企画で冷害の問題を扱っていても、総合面や社会面など全国向けの紙面では、岩手県の状態ばかりでなく東北地方全体の冷害が稲に与えるその深刻な影響については記事としてまだ載りませんでした。

東京が台風によって水害にあっていた頃、米の作柄がはじめて全国版の紙面に公表されました。8月28日（朝日）では、岩手県の作況指数91と「やや不良」ではありましたが、県内で噂されるほどオーバーな状況ではないと思い直しました。全国版の紙面の「コメ」問題は、もっぱら経済面の「輸入自由化」の問題でした。

週末に新幹線で縦断する岩手の米作地帯は、9月下旬になっても青々とつ立っている田圃が続く風景でした。素人目にみても、例年の風景と違い、やはり凶作なのかと考えさせられるようになりました。

10月末、'93年米の作況指数がでてみると、それまで回を重ねるごとに値を低く予想される作況指数の見込みをさらに大きく下回って、岩手県は全体で33、県北では7というありさまで、8月からささやかれていた状況が、現実のこととしてつきつけられることとなりました。

そのころから生活上の変化がやってきました。まず盛岡市内でも決まった米屋さんから米を買っていなかった人たちは、米を手に入れることが困難になりました。スーパーマーケットでは米の棚が空となり、米が販売される日は、学生もゼミに遅刻しても米を買うために並ばざるを得ない状況になりました。ところが同時期、東京では、どこのスーパーでも例年通り新米が山積みでした。生産地近くの都市ではすでに10月から始まっていた米の不足は、10月の東京では実感できませんでした。

そこにあるのは、極端な米の供給の地域間不均衡であって、今日のような全国的な国産米の品切れ状態ではありませんでした。

私自身、3月15日現在、このエッセイを書くに当たって、7月からの新聞を調べながらここ半年のことをふりかえってみても、米生産地に近接する都市で経験した生活と、週末の東京でみてきた首都圏の消費者としての生活とのギャップは、依然として今でも実感としてはうずまりません。

まして、冷夏の中、「米を育てる」人と、首都圏で「商品としてのコメ」のみと対面する人との間では、コメをめぐる問題も違う地平の上に存在し、理解や共感以前の問題がすでにあるのではないかと感じました。すなわち、いくら生産者が米問題を語ってきても、「商品としてのコメ」が大消費地で不足するという問題が顕在化するまでは、米の問題は、社会問題化しないのではないのかと思うこのごろです。

